

CASE 1

「おーい、渥美君お昼休みー。」

「はい。」

いつも先輩はお昼に声をかけてくれる。作業に没頭して時間が分からなくなってしまいう僕を、気にかけてくれているのだろう。

僕は、渥美仁。先月二十六歳になったばかりだ。〇〇技研に勤めて、四年目になる。フォークリフトを使って、製品の入った段ボールを所定の場所に運ぶ単純作業だが、丁寧に間違えないように気を使って作業をするので、つい周りが見えなくなってしまおう。

「予定通りの進行ですね。午後は東棟の荷物をこっちに運んで…」
午後の予定を確認していると、いつものニヤニヤ顔が目に入った。ひげを生やして目尻にしわを作りながらこちらを向いているのは、この会社の社長だ。目が合うと、

「お前、いい顔になったな」

とひとこと、社長はいつもの柔らかい声でぽつりと言った。

「何ですか、急に」

「会社に入ったばかりのころは、こんなだったもんなー」

とって社長は、肩をすぼめてうつむき加減だった、昔の僕を模倣した。

「どんなですか」

照れくさいし、恥ずかしいし、ついぶっきらぼうに答える僕を、周りの先輩たちが大笑いして見ている。

僕の毎日は、充実している。

あのころは、こんな風に思える日がくるなんて、思えなかった。

僕は小さいころから人付き合いが苦手で、小学生の頃は誘われれば遊ぶことはあったけど、自分から遊びに誘うことのない子供だった。忘れ物が多くて先生に注意されることはしょっちゅうで、夏休みの宿題など計画的に行うことが苦手なので、いつもギリギリ。母はよく手伝ってくれたが、大きくなるにつれて、うるさく思うことが増えた。

人と話すのは嫌いではないが、突然の出来事が苦手で、どうしていいかわからなくなってしまう。さらに、集団行動ではみんなのペースに合わせてられずいつも遅れを取っていた。中学・高校と進むと少しずつ一人でいることが多くなり、昼休みをよく図書館で過ごしていた。

僕にとって、学校は楽しくないところだった。

それでも成績はいつも中位から上位で、まじめにコツコツと勉強してたこともあり、大学には無事に合格。父も母も喜んでくれて、心機一転がんばろう、と大学生活に期待していた。

ところが、親元を離れた大学生活は、上手くはいかなかった。学業、コンビニのアルバイト、家事、すべてのスケジュールを自分で管理することは簡単ではなかった。遅刻が増え、次第に休みも増えていった。

目まぐるしい一人暮らしの時間管理はとても難しいものだった。

「渥美さん、このままじゃ卒業できないよ。卒業できるように単位取得のカリキュラムを作ってあげるけど…」

四年生目前の三月、大学の支援室で先生に告げられた。

「そもそも君は、就職活動もしていないだろう？将来はどうするつもりなんだい？あと一年あるって思ってるかもしれないけど、先を見ていま動かないと君が困るんだよ」
自分でもわかっていた。動かなくてはならないことを。でも同時に、どうしてよいかわからず動けない自分がいることもわかっていた。

「…焦ってはいませんが、どんな仕事を目指せば良いかわからなくて…」
「とりあえず、このカリキュラムをこなして、卒業はしましょう。就職のことも同時進行で進めてみてください」

「…はい」
言われたことをこなすのが精いっぱい、どんどん時間だけが過ぎていった。何とか卒業できたのはうれしかった。行き先が決まらないまま、実家に戻った。

気づけば、引きこもり生活が二年を過ぎようとしていた。

いつものように、家族がリビングからいなくなったのを見計らって冷蔵庫へ向かう。部屋から出ない僕を、父も母もひどく心配しているのは知っていた。明るく元気な母の笑い声をしばらく聞いていない。だからこそ、顔を合わせたくなかった。気配を感じるたび、何とかしなくちゃ、と強く感じるのだが、どうしていいのかわからない。

その日に限って、父と母はリビングの隣の和室で話をしていた。

母が、泣いている。

その声に、胸の奥がすごい力で締め付けられた。

「もう私、どうしていいか、わからないわ…。仁はどうしたら…働くようになってくれるのかしら…」

普段は僕に何も言わずにいてくれる母も、心配の限界なのだろう。小さい頃はよく怒ってくれた父も、最近では何も言わず、僕に近づかなくなった。

気づいたら、僕は部屋に入っていた。

「仁…」

「…このままじゃいけないってわかっているんだ。でも、どうしたら社会で働けるのか、たまたまなく不安で…」

もう、止められなかった。何をやってもうまくいかない僕が、何をどうすれば、どんなところで働けるのか、就職しても続くのか、一生このままなんじゃないか、とにかく不安な気持ちをはきだした。

泣きながら聞いていた母の横で、ずっと黙っていた父が一枚の紙を差し出してくれた。

「仁、一度ここに行ってみないか」

「地域若者サポートステーションはままつ…あった、ここだ」

父からもらったチラシは、就職の不安、心配なことを個別にサポートしてくれる場所らしい。ハローワークで見つけ、僕に見せる機会をうかがっていたそうだ。外に出る勇気が整うまでに二週間ほどかかったが、僕は今サポートステーションはままつのドアの前にいる。

「こんにちは、どうぞ奥へ」

大きな窓から光が差し、明るいロビーだった。緊張していてそのくらいしか覚えていない。ものすごく歓迎されるわけでも、腫れ物に触るように接するわけでもなく、居心地が良い空間だった。奥の部屋で担当の鈴木さんと出会う。

少し年配の落ち着いた声の人だった。冗談を言うわけではないが、いつもほんのり笑顔で話してくれる。自分の今の状況を話し、不安な気持ちも少しだけ説明した。まだすべてを話すまで僕の心が動かない。次の約束をして、その日は帰った。

何かが、変わるかも。僕の中で温かい何かが生まれていた。それは、まだまだほんの小さなかけらだった。

それから鈴木さんと何度か話をして、僕がどういう人間か改めて分析していった。

「ふむ……これまでのお話をお聞きすると、あなたの得意なことは、コツコツと地道に取り組むこと。反対に、苦手なことはスケジュール管理とコミュニケーションですね」

「あ、改めて言われると凹みますね。いや、その通りなんですけど」
もじもじする僕に、鈴木さんはまじめな顔で言った。

「得意なことを生かして、苦手なことを改善していきましょう。自分を知ることができたのは、大きな一歩です」

僕の中の温かい何か、は少しずつ大きくなっていく。

サポステはままつとは、具体的にどんなことをしてくれるのか、鈴木さんは細かく説明してくれた。その人の苦手なことを補うための講習を開催しているという。僕の場合は、コミュニケーション力をアップさせるためのトレーニング、就職をしたことが無いので就活に必要なノウハウを教えてくれるセミナーなどだ。初めのころは緊張していたが、一緒に受講している人たちも、同じようにコミュニケーションが苦手だった。少人数で丁寧に教えてくれるので確実に身についていくのが分かった。

今日は、コミュニケーションワークで、電話のかけ方を学ぶ。職場で電話に出ることになれば、僕はきつとパニックを起こすだろう。その初期段階の不安を取り除くところから講習を始めてくれた。

「仕事の電話では、受け答えを覚えてしまえばある程度は乗り切れます。わからなくなったら無理に応えようとしないで、少々お待ちください、と時間をもらうようにすればよいのです。そのパターンをいくつか覚えることから始めましょう」

就活セミナーでは、面接での身だしなみから、話し方など、これまで常識の範囲内で、

というようなあいまいな言葉でまとめられていた事柄をひとつずつ細かく教えてくれた。ざっくりと説明されると答えが分からない僕にとってとてもありがたかった。

鈴木さんは、僕に合いそうな職場を見つけては、一緒に見学に行ってくれた。ただ、いくつも見学に行っても、複雑な仕事を覚えられるのか、スピードについていけないのか、など自分に務まりそうにないと思えてしまって、前に進めずにいた。

「なかなか思うようにいきませんね…」

ポロつと本音を漏らした僕に、鈴木さんは

「それはそうですよ。焦らずじっくり、渥美さんのペースでやっていきませんか？」

と声をかけてくれた。このころには、不安なことやわからないこと、「自分にはできそうにない」という弱音も鈴木さんに話せるようになっていた。鈴木さんは相談するたびに必要な講習を勧めてくれたり、細かいアドバイスをくれたり、いろいろな話をしてくれた。

講習はだんだん実用的になっていき、自分の強みを生かせそうな仕事を探す、仕事のイメージづくり、実際の面接の雰囲気での練習などを重ねていった。

八カ月もたったころ、鈴木さんに呼び止められ職場見学を勧められた。

「渥美さん、この求人、どうですか？渥美さんの得意分野だと思います」

「本当ですね、興味あります。でも…自分にできるかな…」

「実は先日社長さんに会ってきました。サポステのことをお話しして、興味を持ってくださったんです。工場見学も受け入れてくれたので、一度見に行くだけでも、私と一緒に行ってみませんか？」

「…はい。行ってみます」

鈴木さんが、いろいろな会社を回ってサポステのことを紹介して見学の依頼をしてくれていたのは知っていた。今までは見学に行く前に、無理かも、と思っただけで断ってしまっていたが見に行く前に決めつけるのはやめよう、と前向きに考えられるようになってきていた。講習をたくさん受けて、できることが増えた、ということと、自分が働くことのイメージができるようになってきたことが大きい。

僕の中の温かいものは、だんだん形がはっきりしてきていた。

工場見学当日、いつものように鈴木さんと現場を見せていただいた。

「生産ラインの部品を、フォークリフトを使って別棟に運搬してもらいます。同じことを地道に作業するのが好きな人に向いていると思います。」

社長さん自ら説明してくれて、できるかも、と直感で感じた。鈴木さんが掛け合ってくれて、後日、面接をしてもらえることになり、がんばってみたい、と自然と心が動いていた。

温かいものの正体は、自信、だ。

ひとつひとつ講習を終えるたびに、知識だけが増えていると思っていたが、一番増えたものは自信だったんだ。失敗経験のある面接はとても苦手だが、質問されることのパターンを覚えたし、分からない時の対処法も教えてもらった。不安はぬぐえないが、もう逃げたくない。

「明日、面接に行ってくる」

短い言葉で、母に伝えた。顔が一瞬だけ明るくなっただけで、すぐに不安でいっぱいになった母の顔を僕は見逃さなかった。

「分かった。ワイシャツにアイロンが必要ななら、言ってね」

がんばれ、とか、スーツは？靴は？とか、普段の母ならマシニングンのように言うだろう。ぐつとこらえてくれたこと、黙って夕食に僕の好きなものを出してくれたこと、緊張で朝早く起きすぎた僕よりも早く起きていたこと…逆にプレッシャーなだけでどな…。

「行ってらっしゃい」

父まで、玄関で送り出してくれるし…。

ありがとう。やれるだけ、やってみる。

面接には、鈴木さんも同行してくれた。心強い。僕にはこんなに支えてくれる人がいる。そう思うと、身体の底から力が湧いてくるのが分かった。形になった、温かいものも手伝って、いつもより大きな声を出した。

「渥美仁と申します。よろしくお願ひします！」

一週間後、面接先から封筒が届いた。本当は部屋で一人で見ただけで、いつも以上に心配そうな母と、なぜか有給休暇をとっている父を見ていると、リビングで開けたほうがよさそうだ。

「はあ…」

ため息をついても始まらない。意を決して封筒を開ける。

「この度は…慎重かつ厳正なる選考の結果、採用することに…採用！」

「採用だって！」

「よかったー！」

大泣きする母と、父の顔を見て、どれだけ自分を応援してくれていたのかを実感した。

もうひとり、僕を応援してくれた人に報告したい。採用の通知を伝えると、鈴木さんは「おめでとうございます！渥美さんが頑張った証拠ですね」と心なしか震える声で祝ってくれた。僕の方だけではない、と感謝を述べると、これからのことなどを教えてくれた。

こうして無事、僕は就職を決めることができた。

僕は今でも時々サポステに面談に行っている。

「こんにちは」

「こんにちは、渥美さん。二カ月ぶりですね」

面談と言っても雑談する程度で、鈴木さんと職場の話などをするだけだ。

「どうですか？最近は」

「…社長に、いい顔になったって言われました。自分ではわからないんですけどね」

「ふふっ、私もそう思いますよ」

「僕はどれだけひどい顔をしていたんでしょね」

「ははは！でも、どちらも渥美さんご自身です。あの時が無かったら今はないですもの」
本当はもう大丈夫なのかもしれないけれど、つい足を運んでしまう。何かあったら相談できる、という安心感が今の仕事を続けられる理由かもしれない。